

## 祭の思ひ出

「そき」への郷愁



十月ともなると、少年の頃の郷社八幡宮の秋の大祭が、懐かしく思い浮かんでくる。七十年前の昔である。

東京市原成臣

清澄な朝まだき、テンポの速い活発な太鼓の音。小学校（今の公民館）の教室の窓から、松や大杉の森の中に、白い幟がへんぼんとしているのが見える。もう授業どころではない。午前中で終わり。午後は近郷近在から集った人々で、道路はびっしり溢れるほどだ。そして宮の前から植松の入口まで両側にならんだ張り店。台の上に戸板を立てて、その上に色あざやかな品々を立売りにしていた。季節の果物はもちろん、文字どおり綿のようなわたがし、赤と青のダンダラ模様のおめんぼう。女の子にとつては、赤いくしや、銀色ピカ

ピカのひらひらするかんざしなどであったであろう。

ことに強烈な印象であったのは「のぞき」と称した（のぞきからくりの略称）大きな屋台だ。赤ん坊の顔くらいな大きさにくりぬいた穴に、はめこんだ凸レンズから両眼に写ってくるのは強いライトの中に、鮮やかな原色絵の情景や人物だ。演目（だしもの）は、子供はもちろん大人も楽しめる「石童丸」や「カチューシャ」、「武夫と浪子」の涙の物語りなど。それらをのぞき芸人特有のくどき調子で、竹のムチをパチパチたたきながら、大きな絵が上から、或いは左右、横からと、場面が次から次へと変わってくる。後に都会で子供たちに人気があった紙芝居は、こののぞきを小型化したものであり、また今のテレビや映画の原始版とも言えなくはない。

これらの張り店（夜店）は、夕方から夜中まで、一斉にアセチリンガスの裸火をともす。（当時は電灯はなく石油ランプ時代）その強い光と特有の臭いに、エキゾチックな未だ見ぬ都会への憧れをさそわれたものである。

郷土大代を活気づける一案  
(前月についで)

下市 渡 敏 昭

大代を観光地として足を踏み入れてもらえる可能性大なる一、二の例をあげてみますと、石清水八幡宮の境内に聳える天然記念物の大杉群（樹令凡そ四百四十年高さ約三十米）や社殿に保管されている五十一枚の棟札（いまから五一七年前の天文三年から現在まで）拝観を初め当町には古くから伝えられている各寺院及び旧家や美術品愛好家保管の文化財級の財宝も数々あり、その面での観光と又将来予想される地場産業開発によつて商品化された特産物の各商店による展示即売も利用してもらうなど大代は三瓶大森に次ぐ、かなり魅力的大田市第三の観光地として将来大いに希望が期待でき、又大代の観光開発に伴って人の流れが増大すればこれに刺激も加わって産業促進も活発化を促し大江高山を中心に開発が進められる。栗、わさび、椎茸、そば、メロン、わらび、苧等、産業躍進に閃光

を浴びる機会の到来が予想されます。

さて懸案の「観光バス動入！」これは  
はかなり困難と思えますが幸いお隣の  
高野寺が西の高野山として広く知られ  
近來各地から訪れる観光客も増加して  
いる状況から地域行政（大田市と遼摩  
郡の共同体系）の一環として市より働  
きかけてもらって三瓶から大森までや  
つて来ている観光バスを伸ばして水上  
祖式、大代を通り高野寺を巡って海岸  
に抜けるコースが誕生したら郷土を中  
心とする一帯の農家と、死活に貧した  
大代商店街も活気をとりもどし活き活  
きした郷土復興が計られるものと確信  
しています。

皆んなで話し合い皆んなで考え皆ん  
なで携え応援し合って大代の将来に夢  
と希望をもって前進しようではありません  
せんか。

（大代の将来発展を予想し、小・中  
学校はなんとか存置したいものです。  
（なくせば二度と学校はもどりません）

10月少年健全育成指標

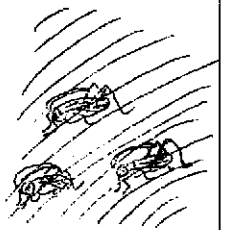
スポーツに汗を流そう

## 壮年期

### の健康

#### に思う

下市 立野 保 雄



九月、十月は健康体育熟年若人の話  
題の多い月です。皆様も御存じの様に  
日本人の寿命は男七十四、女八十を越  
えました。なお成人病の対応如何では  
まだまだ延びてゆく事でしょう。しか  
し長生きだけでいいのでしょうか、い  
や私達は努力して心身共に健やかに社  
会の中の一員として生きたいものです。  
人生、六十を過ぎれば元気だと思っ  
て居る人も病院等の診断によると大部  
分の人が何らかの病氣欠陥を持って居  
るそうです。

最近よく身近な同年輩の人の事故、  
怪我等を聞く度に人事ではないと、つ  
くづく淋しさを感じます。

怪我には色々要因はありましようが  
身体の老化や慢性的な疲れが重大な原  
因ではないかと私なりに思っています。  
明治・大正・昭和初期年代の方は  
組衣粗食に耐え、真面目に勤勉に働き

遅しく生きて来られた人達です。そう

した自分の体を信ずるあまり老化の危  
険が近づいて居るのを見失って居られ  
たのではないのでしょうか、仕事も家事  
も大切ですが先ず自分を大切にすること  
が社会のためにも家のためにも一番  
だと常日頃思う様になりました。

複病息災、これは私のことで足が痛  
い、頭鳴りがする、耳が遠い、心臓が  
弱い、こうした不具合と付き合い乍ら  
息災に過ごして居る事を言い現わした  
ものです。

さて、この不具合との付き合いとし  
て朝の自彊術体操、昼の自家用程度の  
農作業労働、晩の一合半位の酒、下手  
な俳句の頭の体操等です。最後に健康  
は食にありと先日テレビで百二才の大  
先輩の言葉をかみしめて除々に実行に  
移したいと思つて居ります。

### 眼の愛護デーに一言

下市 熊 谷 真智枝

皆さん『アイバンク』についてご存  
じでしょうか。眼球銀行あるいは、角  
膜銀行とも訳されています。正式の名

称は、「眼球あつ旋業」とよばれているように眼球のあつ旋をする所です。すなわち角膜移植を必要とする患者があるとその病院より眼球銀行に申し込む。一方、一般の人々からも眼球銀行は眼球登録を受ける。その登録者のなかから不幸な人が出るとたゞちに眼球銀行に通報され、医師がすぐ（六時間以内）に出張して死体から眼球を摘出して持ち帰り、病院では予定患者に二十四時間以内に手術を終了する。要するに眼球銀行は仲介あつ旋の役目をする所です。

私は昨年、偶発的な事で右の眼を手術することになり、大阪の阪大病院に入院、アイバンクの大切さをしみじみと感じました。同室で大学卒業したばかりの娘さんと小学校六年の娘さん二人とも角膜ヘルペス（ヘルペスが眼球に入る）のため失明、アイバンクのお蔭で又、元の見える眼になって喜んで退院してゆかれました。阪大病院だけでも何人か角膜移植のため入院待期しておられました。アイバンクだけでは絶対数不足。亡くなられた家庭に病院の先生が眼球提供の申しこみに行か

れると、はじめは死体を傷つける事やいやがる遺族も、大切な肉親の体の一部が、又他人の体の一部となって生きつづけるとの医師の説得に、ようやく承知され、持ち帰り、真夜中でもたゞちに手術が行なわれていました。

不幸にして亡くなった際には、すぐ火葬場で灰になるのはもったいない。又しばらくだれかの眼球の中で、役だてるといふ事はすばらしい事ではありませんか。

あなたも、アイバンクに申し込みをされたらいかがですか。

### おしらせ

△大代町上市出身の田中憲経様（田中酒店長男）先日帰郷の際、公民館へ金一封のご寄贈を頂きました。厚く御礼を申し上げます。田中さんは現在横浜市にお住いで、安田信託銀行（取締役）総合企画部長として活躍されています。

△八反田自治会・中島つる子さんより先日体重計（秤）をご寄附頂きました。有難うございました。皆さん健康

### 10月 読書週間

保持の上からも大いにご利用下さい。

△天高く馬肥ゆるの秋、稔の秋、味覚の秋、読書の秋、季節の表現には秋が一番多彩の様です。

お彼岸も過ぎると、次第に夜長となり虫の声も聞えて来ます。猪を追い払う爆音器の音もすっかり少なくなりました。

間もなく読書週間も近づきます。公民館の図書室へも是非お出で下さい。

